

【論文】

福岡県糟屋郡新宮町立花口区における  
生業との関係に着目した長屋門と主屋の成立過程に関する考察

A STUDY OF THE PROCESS OF ESTABLISHING NAGAYA-MON GATES AND  
MAIN HOUSES WITH A FOCUS ON THEIR RELATIONSHIP TO THE  
RESIDENTS' LIVELIHOOD IN TACHIBANAGUCHI WARD IN SHINGU TOWN  
OF KASUYA GUN, FUKUOKA PREFECTURE

松野尾 仁美\*<sup>1</sup>, 赤松 悟\*<sup>2</sup>  
Yoshimi MATSUNOO, Satoru AKAMATSU

**Abstract :** In Tachibanaguchi Ward, Shingu Town, located at the foot of Tachibanayama, Kasuya-gun, Fukuoka Prefecture, traditional buildings built after the end of the Edo Era are concentrated, and with a combination of nagaya-mon gates and the main houses, the ward forms a characteristic landscape. The purpose of the study was then to examine the process of establishment of nagaya-mon gates and the main houses through understanding their shape, structure scale, and construction age by investigating their appearance, floor plans, and house ledgers as well as focusing on their relationship to the inhabitants' livelihood by interviewing local people about the condition of living and how each room was used.

**Keywords :** *Nagaya-mon Gate, Tachibanaguchi Ward, livelihood, the process of establishment*

長屋門, 立花口区, 生業, 成立過程

1. はじめに

1.1 研究の背景

福岡県糟屋郡の立花山の麓にある新宮町立花口区は、江戸時代末期以降に建築された伝統的な建造物が集積しており、特に生活道路に面して長屋門が立ち並び、主屋と長屋門の構成などにより、特徴的な景観を形成している。地域特有の建造物は地域産業との関係が深く、生計を立てるために必然的に生み出された形状や構造も多い。

新宮町町史<sup>1</sup>などによると立花口区の主な産業は養蚕とみかん栽培であり、みかん栽培が基幹産業となっていた年代と長屋門の建築年代が概ね一致することから、筆者は立花口区の長屋門や主屋の構成などの成立過程において、これらの生業との関係性があるのではと推測した。

1.2 研究の目的

本研究では、外観目視調査、家屋台帳、航空写真、聞き取り調査などにより各棟の形状、構造規模、建設年代などを把握し、さらに生業の状況と建造物の使い方などの聞き取り調査より、主として生業との関係に着目しながら、立

花口区の長屋門や主屋の構成などの成立過程を考察することを目的とした。

2. 研究の対象と方法

2.1 研究対象とする新宮町立花口区の概要

福岡県糟屋郡新宮町は、福岡都市圏の一部であり、福岡市の北東に位置する。同町は人口 33,594 人（新宮町 H P より、2021 年 6 月現在）で、福岡市とのアクセスもよく、自然に恵まれた環境である（図 1）。

研究対象とする福岡県糟屋郡新宮町立花口区は戦国武将立花道雪ゆかりの地であり、立花山城址の麓にあたる。

1851 年の「立花城古図」（図 2）と比較すると、大門口からの町を縦断する道路は、当時の形状を保持していることが確認できる。同図においては、長屋門に類似した建造物の描写は見られず、長屋門は近代以降の建築であると推察される。長屋門が立ち並ぶ道は良好な景観（写真 1）を形成しており、現存する伝統的な建造物（写真 2）を登山客の休憩所に活用する取り組みがなされているが、これらの地域資源を活かしきれていない現状があり、今後、観光資源としての活用が期待される。

\*1 建築都市工学部住居・インテリア学科

\*2 株式会社 都市環境研究所 九州事務所所長



図1 福岡県糟屋郡新宮町位置図



(柳河藩立花家文書, 柳川古文書館収蔵, 所蔵元:立花家史料館)

図2 立花城古図



写真1 立花口区の街並みの様子



写真2 利活用されている伝統的な建造物

## 2.2 日本の農村集落における建造物と長屋門の概要と本研究の位置付け

### 1) 農村集落の建造物

日本の農村集落では、敷地の中に主屋と附属屋の蔵、納屋といった複数の建造物を配置し、庭との関係も含めて、敷地と家屋の構成を屋敷として捉えることができる。屋敷内は主に生活空間と農業空間の機能を有しており、地域によって、主屋や附属屋の配置に特徴が出る。こうした配置の特徴は、田圃や水路との関係性から定まる場合があり、地域特有の景観形成につながっている。農村集落における空間構成の変遷とその構成要素がもたらす景観の保全について、麻生氏ら<sup>2)</sup>は「宅地と農地との均衡により地域コミュニティの居住を成り立たせてきた伝統的な空間構成」の重要性と喪失することでの課題に言及している。

### 2) 長屋門

元来、長屋門は武家屋敷の附属屋として建築され、家臣を自分の屋敷周辺の長屋に住ませ、その長屋に門を開いたのが始まりと考えられている。近世以降、農家でも名主など財力や権威のある場合は、建築が許可されてきた。

既往研究では、三橋氏ら<sup>3)</sup>は、長屋門の利活用の実態調査を行なっている。他にも三橋氏ら<sup>4)</sup>は、長屋門のアプローチに着目し、接道や主屋との位置関係を分析している。安武氏ら<sup>5)</sup>の調査では、長屋門の形態について、中央を通りとし、片方が納屋でもう一方に居住空間を持つタイプが多いことを明らかにしている。

既往の研究を概観すると、昭和時代に建築された長屋門を扱った研究は多くないと考えられる。また、三橋氏ら<sup>3)</sup>の調査対象では、長屋門所有者は、米、大豆、梅などを栽培していることが記載されているが、みかん栽培の記載は見られない。その他の研究でも、みかん農家と長屋門の関係を扱ったものは見られない。

### 3) 生業と建造物の成立過程やその特徴

生業と建造物の成立過程やその特徴に関係した既往研

究を見ると、農村住宅における養蚕との関係性を扱ったものが多い。養蚕は農家にとって現金収入が得られる主な生業であり、蚕の飼育を行った建造物の屋根形式などにその特徴が現れているものがある。溝口氏ら<sup>6)</sup>は、近世において養蚕の興隆は住宅建築にも影響を与えたとし、生業としての養蚕が一般化するの近代であると指摘している。

ところで、本研究における研究対象の福岡県糟屋郡新宮町では、みかんが基幹産業だった時代があり、みかんの生産が建造物の造りに影響したのではないかと筆者は推察している。そこで、関連の既往研究を概観したところ、北部九州でのみかん農家の建築物と生業との関係を扱ったものはあまり見当たらず、調査事例は少ないと思われる。

### 3. 研究の方法

本研究では、福岡県新宮町立花口区で、宇屋敷の範囲を中心に歴史的建造物を対象とし(図3)、系統的調査を2017年4月から2020年1月まで実施し、2022年に補足のヒアリング調査を実施した。研究の方法は以下の通りである。

#### ①外観目視調査による屋根形状、構造規模の把握

外観目視調査では、伝統的な構法で建築された主屋と長屋門を対象とし、屋根形状、構造規模を一覧に整理した。更に、地図上に対象建造物をプロットし、長屋門の接合状況や主屋との関係を整理した。

#### ②家屋台帳と航空写真の確認と聞き取り調査による建築年代の把握

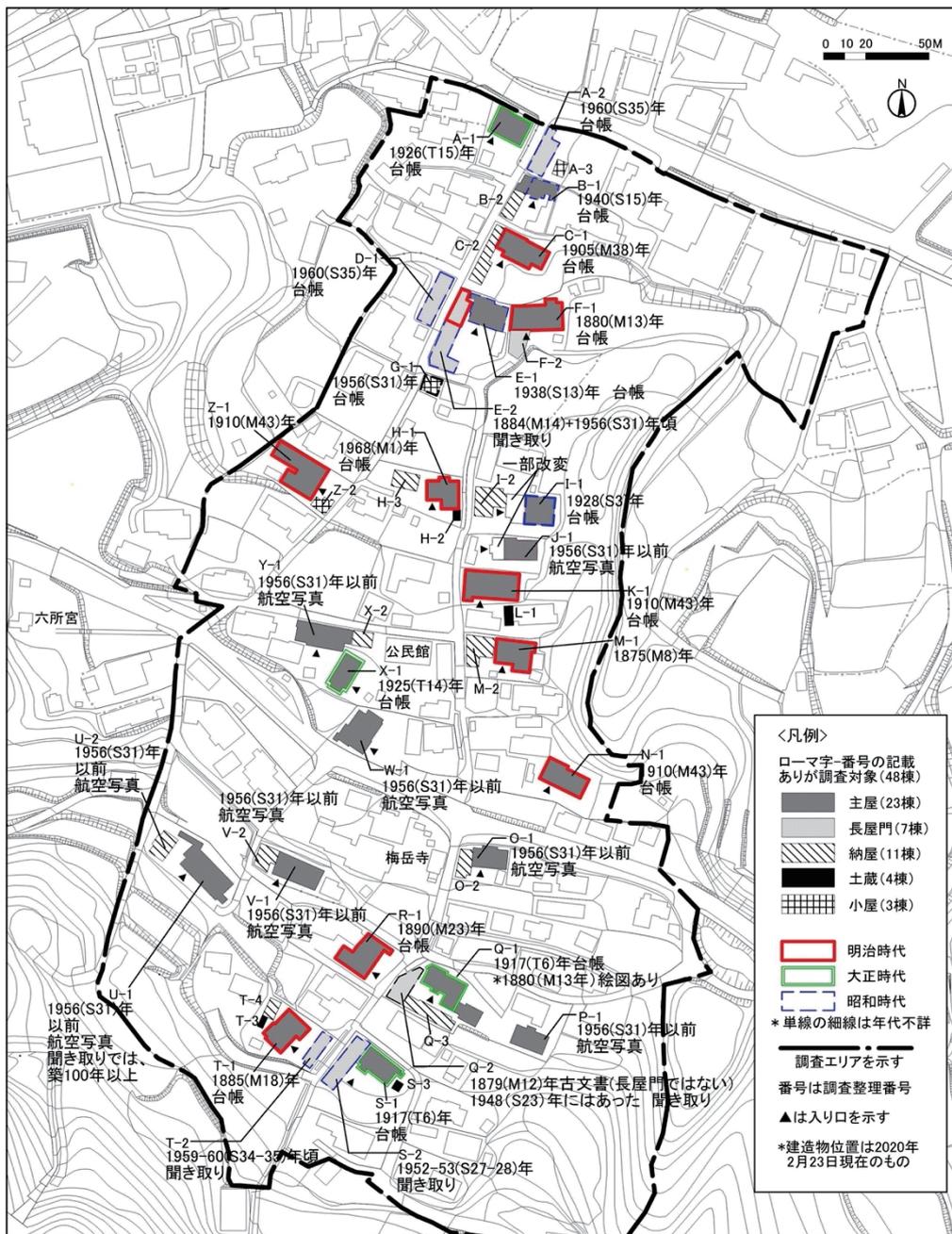


図3 調査対象建造物位置図

家屋台帳から対象建造物の建築年代を確認するとともに、確認できなかったものは航空写真の確認と聞き取り調査にて建築年代を把握した。

### ③聞き取り調査による生業の状況と主屋と長屋門の使い方の把握

住民への聞き取り調査を行い、みかん栽培を中心とした生業の状況と長屋門の使い方について把握した。

### ④建築年代と生業や長屋門の使い方の関係性の考察

建築年代順に並べて整理した主屋と長屋門と、当時の生業と照らし合せ、建造物の変遷を考察した。

## 4. 立花口区宇屋敷での建造物について

### 4.1 歴史的建造物の分布

文化庁は登録有形文化財（建造物）登録基準を原則として、建築後50年を経過としており、1975年以前には現存しないと航空写真から判断できる建造物と外観目視で明らかに建築年代が新しいと判断できる建造物は研究の対象外とした。その上で、歴史的価値があると考えられる建造物を対象に詳細な調査を行い、図3にまとめた。

調査から、立花口区宇屋敷に残存する歴史的に価値があると考えられる建造物は48棟と推定される。対象建造物は、主屋と附属屋に大別され、附属屋は、長屋門、納屋、土蔵、小屋に分けられる。48棟のうち、主屋は23棟、長屋門は7棟（うち1棟は変形）、納屋11棟、土蔵4棟、小屋3棟である。主屋については、鉤屋と直屋に分けられるが、家屋台帳による年代確認により、鉤屋は年代が古いものであることがわかる。鉤屋は3棟となっており、希少である。直屋の主屋については、規模に応じて梁間が大きくなるものの、間取りには立花口区の型があるのではと推察している。長屋門については、昭和時代（1926年～1989年）に建築されたものが散見しており、第7章で生業との関係性を含めて考察する。

### 4.2 主屋の建築的特徴

立花口区の調査対象の主屋の特徴を以下に記す。

- ・主屋では、建築年代が明治時代前期（1868年～1889年頃）ではいずれも鉤屋で、明治時代中期（1889年～1904年頃）以降では直屋となっている。鉤屋はいずれも、茅葺き屋根（現状はトタンで覆われている）となっている。
- ・直屋の主屋においては、入り口部分（玄関）が改変されているものが複数みられる。農村住宅では土間であった入り口部分が、生活スタイルの変化から、土間の利用頻度が減少し、改変されたことが想定される。改変では、入り口部分（玄関）に床組を行い、更には2階をのせ、居室としている事例が多い。
- ・屋根形状を見ると、富田氏の調査<sup>7)</sup>の通り、まちの主要な道路に対し、棟方向は西接道では東西軸、東接道では南北軸となっている。
- ・直屋の間取りを見ると、田の字型の四つ間取り（図4）

を基本とし、規模が大きくなると六つ間取りのものもある。概ね、入口部分を正面にして立ち、向かって右手（上手）側に、ナカイ、ザシキを配し、左手（下手）にウシゴヤを配する。入口部分から入っては土間であり、ニワと呼ぶ。いずれの直屋も接道状況や棟の向きが変わっても、上手下手は変わらず、同様の型を保持している。

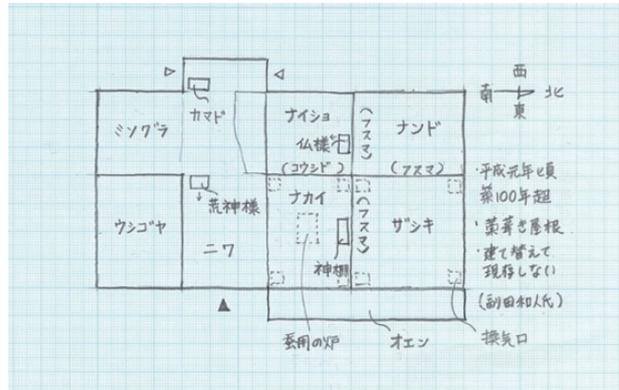


図4 副田家住宅の間取り（ヒアリング調査でのメモ）



写真3 養蚕を営んでいた床下の遺構（調査番号R-1）

- ・直屋の入口上部には、下屋を回し、その部分には出梁、持ち送り、丸桁の意匠が見られる。
- ・許可を得て内部の調査ができた建造物6棟（A-1, H-1, R-1, S-1, T-1, X-1）のうち、A-1（大正15年、1926年建築）とR-1（明治23年、1890年建築）において、養蚕を営むための仕組みがあったことを捉えることができた。R-1の主屋では、床下に養蚕のためと考えられる遺構が確認された（写真3）。また、ナカイの天井の四隅には穴があることが目視でき、天井から蚕のための棚を吊り下げていたと推察できる。

### 4.3 長屋門の建築的特徴

立花口区の調査対象の長屋門の特徴を以下に記す。

- ・図3に示すように長屋門の建築年代は、7棟中の5棟が昭和30年代（1955年～1964年）に集中している。これらは、基礎の形状が伝統的な工法でないことから、昭和時代（1926～1989年）の建築と目される。残りの2棟は、建



写真 4-1 長屋門外観：道路側（調査番号 A-1）



写真 4-2 長屋門外観：下屋（調査番号 A-1）

築年代が不詳であるが、航空写真から 1956 年以前の建築であると推定される。

・長屋門は、ほぼ道に並行に配置され、かつ、道路境界のきわに建築されており、道路から長屋門までのアプローチがないものが、7 棟中 6 棟となっている。

・長屋門の外壁の一部には、煉瓦積みの部分があり、聞き取りによると牛や馬の餌置き場などであったと見られる。  
 ・変形した 1 棟をのぞき、残りの 6 棟の長屋門には概ね梁間 2 間の下屋がついており、特徴的な造りとなっている（写真 4-1, 4-2）。他地域での事例を見ると、星野氏<sup>12)</sup>による宮城県栗原市の農家型住宅の長屋門の調査では、長屋門に下屋は見当たらない。その他、安武氏ら<sup>5)</sup>の調査などでも下屋の事例はなく、立花口区の大きな特徴ではないかと推察される。

・長屋門は 2 階建となっており、概ね 2 階は居室、1 階は倉庫となっている。

・主屋との配置を見ると、6 棟中 4 棟が長屋門に対して、主屋は直行している。残りの 2 棟の主屋については、1 棟は建築年代が古い鉤屋であり、時代が新しい直屋のものとは関係性についての性格が異なると考えられる。もう 1 棟の主屋は建て替えられたものであり、航空写真によると建て替え前は、長屋門と直行方向に配置されていた。

#### 5. ヒアリング調査による建造物の使い方や暮らし方

まちの歴史をよく知る地元住民や長屋門の所有者にヒアリングを行い、その内容を表 1、表 2 にまとめた。

まちの歴史をよく知る地元住民（昭和 12 年生まれ）の話から、立花口区で養蚕が営まれていたことは確認できたが、「自分が小さい頃には、すでに養蚕は行っていなかったが、家には蚕を飼育していた痕があった」との証言から、その時代には養蚕は主要な産業ではなかったと推察する。また、写真 3 のような養蚕のための主屋の床下に穴を掘って暖房としていたとの証言も得られた（表 1）。

長屋門 T-2 の所有者（昭和 23 年生まれ）から、「小学校 5、6 年生の頃に建て、みかんの繁忙期には、オトコシさん、オナゴシさんを雇って、長屋門の 2 階に寝泊まりしていた」との証言があった。長屋門 D-1 の所有者（昭和 24 年生まれ）から、小学校 2、3 年生の頃に建て、長屋門が建った頃はみかん専業だったとの証言があった（表 2）。

表 1 まちの歴史をよく知る地元住民のヒアリング調査

調査方式	対面でのヒアリング	調査日時	令和2年(2020年)1月24日13時~14時半	調査場所	立花口精米所
調査対象者	副田正人氏(昭和12年生まれ)	調査者	九州産業大学 松野尾仁美 都市環境研究所九州事務所所長 赤松悟 (立ち合い者 堀田晴夫氏)		
ヒアリング内容	生業について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分自身の生業としては、米少々のみかん少々を扱っていた。</li> <li>・自分が小さい頃には、すでに養蚕は行っていなかったが、家には蚕を飼育していた痕があった。</li> <li>・みかんで生活できるようになったのは戦後ぐらいだった。昭和 30 年代は政府の構造改革事業のみかんが推進された。</li> </ul>			
	主屋	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主屋は「オリア」と呼んでいた。</li> <li>・ナカイとザシキの部屋の天井の四隅には、養蚕に関係した換気口があった。</li> <li>・家には蚕を飼育していた穴等があり、入り口からオモテの方(ナカイ)の床下に穴を掘っていた。暖房が目的で、蚕がいない時期は畳を敷いていた。</li> <li>・牛馬は大事であり、同じ棟に棲ませていた。</li> </ul>			
	長屋門	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長屋門は「イナヤ」と呼んでいた。納屋の一種で、人が居るから「イル」、「ナヤ」だと思う。</li> <li>・全てが手作業で、人手が足りない家は、おなごし、おとこしと呼ばれる人を雇い「イナヤ」の 2 階に住ませていた。1 軒に二人くらい雇っており、生活は家族と一緒にあった。</li> <li>・「イナヤ」の 1 階には、収穫したみかんを保管していた。</li> <li>・大門口から南に下がって、西接道側 4 軒目の建物で道路側に設けられている引戸は、みかんが痛まない為の通風の役割である。元々、この部分は道路の東半分が川であったことから、ここ引戸からの出入りはない。この建物の基礎部分(の石積み)は、自分が若い頃に手伝って工事を行った。</li> </ul>			

表 2 長屋門所有者からのヒアリング調査

調査方式と調査場所		Q-2,T-2,D-1,E-2 長屋門前での対面でのヒアリング		調査日時	令和4年(2022年)5月14日9時~12時半
調査者		九州産業大学 松野尾仁美(立ち合い者 堀田正哉氏)		調査対象者	Q-2,T-2,D-1,E-2の長屋門の所有者
調査番号	所有者の誕生年	建築年について	生計について	長屋門の使い方について	
長屋門 Q-2	昭和 23 年 (1948 年)	<ul style="list-style-type: none"> <li>家に伝わる絵図(明治 23 年)では、道路から見て長屋門の入り口向かって左手側には建造物があり、右手側には建造物がなく、池となっている。また、道路から見て長屋門の入り口の右手側には、構造を継ぎ足した様子があり、増築と推察できる。</li> <li>増築の時期は不明であるが、自分の若い頃からあったとの証言があった。</li> <li>*1961年に撮影された航空写真では、存在が確認できた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分が小学校の頃(昭和 30 年から 37 年頃)は 3 人を雇っており、みかん生産が忙しかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>みかん生産を手伝うオトコシさんとオナゴシさんが長屋門の 2 階で寝泊まりしていたが、その後、子ども部屋(自分の部屋)として使うようになった。</li> </ul>	
長屋門 T-2	昭和 23 年 (1948 年)	<ul style="list-style-type: none"> <li>長屋門は、自分が小学校 5、6 年生(1959 年、1960 年)の頃に建てた。</li> <li>*1961年に撮影された航空写真では、存在が確認できた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>主な生計はみかん生産であった。小学 6 年生の頃に酪農を始めた。乳牛を 31 頭、飼っていた。</li> <li>みかんは繁忙期が 6 月で、オトコシさん、オナゴシさんを雇って、長屋門の 2 階に寝泊まりしていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>長屋門は最初から 2 階建てであった。2 階には 4 部屋あった。</li> <li>長屋門は農機具の保管などをしていた。</li> <li>みかんは長屋門と主屋の裏に保管していた。</li> </ul>	
長屋門 D-1	昭和 24 年 (1949 年)	<ul style="list-style-type: none"> <li>長屋門は小学校 2、3 年生(1957 年、1958 年)頃に建てた。</li> <li>*昭和 37 年(1962 年)の確認済証が張ってあった。</li> <li>*家屋台帳では、昭和 35 年(1960 年)の登記</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>長屋門が建った頃は「みかん専業」であった。うんしゅうみかんを主に扱っていた。</li> <li>みかんの単価が下がって、昭和 55 年にはサラリーマンになった。高校を出て 20 年みかんをしていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>長屋門の使い方は、1 階は馬小屋、農機具置き場、納屋、みかんの貯蔵庫として使っていた。馬小屋の前は、堆肥小屋があった。</li> <li>収穫したみかんは、納屋の中や庭に積んでいた。</li> <li>2 階は、昔はワラ小屋として使っていた。床間付きと 10 畳の部屋があった。子供部屋として使っていた。</li> <li>長屋門は増築せず最初からこの規模だった。</li> </ul>	
長屋門 E-2	不明	<ul style="list-style-type: none"> <li>道路から見て左手(入り口部分から左手)側に、明治 17 年の建築と建物に書かれている。</li> <li>*副田正人氏の聞き取りから、道路から見て右手(入り口部分から半分)は、増築と推定される。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生計はみかん生産と稲作(田んぼの作付け面積が多い)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>長屋門の 2 階には親戚が住んでいたと聞いている。</li> <li>倉庫として使用していた。</li> </ul>	

さらに、長屋門 Q-2 については、「家に伝わる絵図(明治 23 年)では、道路から見て長屋門の入り口向かって左手側には建造物があり、右手側には建造物がなく、池となっている。また、「道路から見て長屋門の入り口の右手側には、構造を継ぎ足した様子がある」との証言や目視での確認から、長屋門は増築ではないかと推察できる。

ヒアリング調査から、長屋門は 1 階をみかんの保管場所、2 階居室を繁忙期に人夫を雇用するために使用することなど、みかん栽培で生計を立てるために建築された可能性が考えられることが把握できた。また、直屋を「オリヤ」、下屋を有する長屋門を「イナヤ」と呼んでいたとの証言を得られた。

## 6. 地域基幹産業の変化について

糟屋郡新宮町の地域基幹産業について文献調査や聞き取り調査の結果を整理した。

みかん生産については、1960 年代は、西日本でみかん栽培が拡大した時期であるが、福岡県統計年鑑<sup>9)</sup>で糟屋郡のみかんの作付面積及び栽培面積の変化を見ると、昭和 33 年(1958 年) 188.5ha だったのが、昭和 37 年(1962 年)に 340.3ha、昭和 43 年(1968 年)には 723.0ha と 10 年で約 3.8 倍と急速に拡大していることが確認できた(図 5)。

その後、みかんは生産過剰となり、昭和 47 年(1972 年)頃にみかんの価格が暴落している。みかんの単価が下がり、生計をたてるのが難しくなり、1980 年にサラリーマンに転職したとの証言があった。

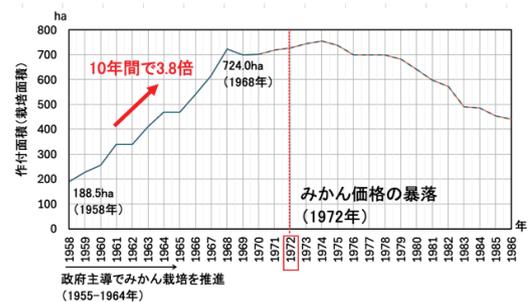


図 5 糟屋郡のみかん作付面積及び栽培面積の推移

(データ出典：福岡県統計年鑑<sup>9)</sup> 1970 年以降は栽培面積として集計)

養蚕については文献<sup>8)</sup>によると、明治 20 年代に副業として養蚕が始まり、昭和 14~15 年(1939~1940 年)頃には廃止となったことが記載されている。文献<sup>10)</sup>によると、明治時代中頃まで、蚕種を居間の天井に吊したことや主屋の畳を取り払って炉を掘り、採暖したことが記載されている。福岡県下では、大正時代末期から昭和時代初期の不況期に農家の副業として最盛期を迎えたことが記されている。

## 7. 研究の成果と今後の展望

以上の調査結果より、地区の建造物全体の成立過程をまとめた(表3)上で、主屋及び長屋門の成立過程と生業の関係を考察した。以下にそのまとめを記す。

- ・歴史的価値がある建造物で主屋は明治時代(1868~1912年)のものが多く、長屋門は昭和30年代(1955~1964年)のものが多く、地元住民は、直屋を「オリヤ」、下屋を有する長屋門を「イナヤ」と呼び、この地域ならではの建築的特徴を保有する可能性が示唆される。

- ・主に、明治時代中期(1899年)から大正時代(1912~1926年)にかけて養蚕が行われており、明治23年(1890年)と大正15年(1926年)に建築された主屋では、養蚕を営むための仕組みが見られた。一方で、養蚕は建物全体の形状には大きな影響を与えておらず、床下の炉や棚板の設置など軽微なものにとどまっている。養蚕は副収入のために兼業している事例が多く、主屋の天井四隅に通気口を設ける建築形態は、全国的にも明治時代の建築に見られ、立花口区にあっても例外でないと考えられる。

- ・政府主導でみかん栽培が推進された昭和30年代(1955~1964年)に、長屋門の建築年代が集中している。ヒアリング調査では、長屋門の1階部分をみかんの保管場所として使用し、2階部分の居室は繁忙期に人夫を雇用するために使用していたと複数の証言を得ている。みかん生産で生計を立てるために必要な居室や倉庫といった機能を有する長屋門と作業場所としての下屋が組み合わされた形状は、利用しやすい建造物であったと思われる。

- ・いくつかの長屋門には、構造を継ぎ足した様子があり、その場合、元々存在した土蔵(蔵)と納屋(倉庫)の隣棟間の上部に室を増床したのではと筆者は推察しており、この形状が立花口区固有の長屋門の特性であると考えられる。増床の理由として、みかん栽培の人夫確保のためなどが考えられ、みかんの産業振興に成功した結果の形態ではないかと推察する。

以上より、立花口区の主屋は養蚕、長屋門はみかん栽培といった生業と関係があることが把握できた。

このように、近代中期からの養蚕農家集落としての建造物の特徴を残しつつ、昭和時代のみかん栽培のために建築されたと推察される長屋門が残存するなど、集落の町並みの空間特性が建造物から説明ができ、これらが渾然一体となった文化的な町並みを今に伝えていることの価値は高いと考えられる。調査の結果は、地域産業との関係が深く生計を立てるために必然的に生み出された建造物の形状、またそれらによる町並みの一事例を示すものといえる。

本研究は、立花口区において、歴史的建造物を活用した町づくり活動を行う場合、その基礎資料として役立つと考えている。今後は立花口区の歴史的な建造物の調査を継続しつつ、他地域と比較した上で、この地域ならではの特徴の詳細な分析を進める必要がある。

## 謝辞

本研究の調査では、地元まちづくり団体TAP会長堀田晴夫氏、堀田正哉氏、高木昭典氏、高木克博氏に、ご協力頂き、感謝申し上げます。副田正人氏、堀田徹氏、堀田正道氏、堀正香氏、上野勝彦氏、石川賢二氏にはヒアリングにご協力いただきました。新宮町のみなさまには、大変お世話になり、この場をお借りして、お礼申し上げます。

また、本稿は、2017~2019年度の新宮町からの九州産業大学景観研究センターへの委託研究の一部として行なった調査に基づき執筆いたしました(調査結果は、2017~2019年度景観研究センター活動報告に掲載)。なお、本稿は27th Pacific Conference of the RSAI 2022 in Kyotoの口頭発表、2022年度景観研究センター活動報告の掲載原稿に、新たな考察を加筆したものです。執筆に際し、九州産業大学景観研究センター所長の山下三平教授をはじめ、同センターの皆様には、ご指導を賜り、お礼申し上げます。

## 参考文献

- 1) 新宮町誌編集委員会編 新宮町町誌,新宮町,1997年1月
- 2) 麻生美希,増原実樹,佐藤睦美,西山徳明 農村集落における空間構成の変遷と景観保全の課題 岐阜県大野郡白川村萩町を対象として,日本建築学会計画系論文集,第74巻,第646号PP2637-2645,2009年12月
- 3) 三橋伸夫,本庄宏行 農村系長屋門の利活用実態とその持続性に関する研究 栃木県宇都宮市・高根沢町を中心とした事例的検討,日本建築学会計画系論文集第82巻 第732号, 403-409, 2017年2月 J. Archit. Plann., AIJ, Vol. 82 No. 732, 403-409, Feb., 2017
- 4) 三橋伸夫,本庄宏行 屋敷構えから見た農村系長屋門の配置に関する研究-栃木県宇都宮市における事例的検討-,日本建築学会計画系論文集 第82巻 第738号, 1935-1942, 2017年8月 J. Archit. Plann., AIJ, Vol. 82 No. 738, 1935-1942, Aug., 2017
- 5) 安武敦子,大月敏雄,深見かほり 農村部の長屋門の成立過程と利用の変遷に関する研究 茨城県県央の事例を通して,日本建築学会計画系論文集 第82巻 第736号, 1467-1474, 2017年6月 J. Archit. Plann., AIJ, Vol. 82 No. 736, 1467-1474, Jun., 2017
- 6) 溝口正人,野々垣篤 美濃加茂市の養蚕農家住宅 生業からみた近代農村住宅の事例的考察,日本建築学会東海支部研究報告集,第36号,1998年2月
- 7) 富田英夫 新宮町立花口の集落と民家,九州産業大学工学部研究報告第53号, pp.61-68, 2017年3月
- 8) 新宮町誌編集委員会新宮町誌編纂室 立花口民族調査のまとめ,新宮町誌編集資料,平成4年6月~8月
- 9) 福岡県統計年鑑 福岡県企画振興部調査統計課,昭和33年版から平成11年版
- 10) 白水昇,原田角郎,立平進,他4名 九州の生業,明玄書房,1農林業,1980年12月
- 11) 新宮町総務課 新宮町合併50周年記念誌 思い出写真集-新宮謳歌-,平成17年3月
- 12) 星野政博 農家型長屋門実測調査を通じたまちづくり参加報告,日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1,P75-76,2009年9月

